

本格的にダイエットをしたいけれど、パーソナルジムは高くて手が出ない。

そんな私の前に、ある日突然とんでもないチャンスが舞い降りた。

「……パーソナルジムの新トレーニング器具モニター募集？」

ポストに入っていたチラシに書かれていたのは、そんな文言だった。なんでも、新しく導入される最新のトレーニングマシンと、それを使って行う新設されたコースのモニター要員を探しているらしい。対象は女性限定で、報酬は半年間の会員権無料。しかもジム内の設備すべて使い放題の一番高ランク会員権……。

（しかもこれ、駅前の高級パーソナルジムじゃん！あのインストラクターさんが全員めっちゃイケメンだって話題になってるところ……！）出来たときにテレビの取材が来ていたのを思い出す。最新の設備に手厚いサポート、そして何よりインストラクターさんが全員めっちゃ

美形ってことで一躍話題になったらしい。私も興味はあったけど、月額料金が薄給〇〇の私にはとてもじゃないけど手の届かない金額だったからなくなく諦めたんだよなあ……。

……これは、またとないチャンスかもしれない。今までいろんなダイエットを試しては続けられなくて失敗してきた私だけれど、目の保養になるイケメンがいればきつと続くはず……！

……もちろんインストラクターさんをそういう目で見るのはよくないことだから、あくまで内心で目の保養にするだけに留めるけどね！

さて、そうと決まれば早速応募してみよう。募集条件は女性であることだけだし、きつとめちやくちや倍率は高いだろうけど……まあ、落ちたらそのときはそのときだ。

——このときの私は、そんなふうに簡単に考えていた。だから何も深く考えず、チラシを隅々まで読むこともせずに応募の電話をかけてしま

ったのだ。

隅の方に小さく書かれていた一文。

「※応募後のキャンセルは、いかなる場合でも受け付けておりません」  
……この文言の意味をもう少しきちんと考えていれば、あんなことにはならなかったかもしれないのに。

\*\*\*

「初めまして、インストラクターの春野（はるの）です！トレーニング器具のモニターにご応募いただきありがとうございます。とはいえそこまですpecialなことをするわけではないので、どうかリラックスなさってくださいね。良い経験になるよう、僕らも誠心誠意お手伝いしますから！」  
「同じくインストラクターの秋瀬（あきせ）です。貴方がリラックスしてトレーニングを行えるよう、俺たちの手で最大限サポートさせていただきますね」

「は、はい……」

（とうとう来ちゃった……。ていうかインストラクターさんふたりともイケメンすぎない？楽しみにしてたけど、これじゃ逆に緊張しちゃうかも……）

あのあとホームページの応募フォームから応募したところ、あれよあれよという間に気付いたら話がまとまってモニターとしての採用が決まってしまった。9割くらい抽選外れると思ってたのに。

とはいえこれはラッキーだ。ちゃんとモニターの仕事をこなして、半年ですっきり痩せるぞ！……と意気込んだはいいものの、出迎えてくれたインストラクターさんが想像以上にイケメンすぎたおかげで緊張してしまい逆に帰りなくなってるのが今の私である。

だって仕方ないだろう、……本当に、ふたりともめっちゃイケメンなんだから。

柔らかな栗色のストレートヘアに、ぱっちりとしたアーモンドアイが印象的な春野さん。アイドルグループのセンターですと言われても信じてしまいそうなほどに中性的で整ったアイドルフェイスを持つ彼は、店内に足を踏み入れた瞬間最新設備と清掃の行き届いた綺麗な空間に圧倒されて固まってしまった私に笑顔で声をかけてくれた救世主でもある。

そしてその隣にるのが秋瀬さん。さっぱりとした短い黒髪に、切れ長で涼しげな目元が特徴的な美形だ。一見したら冷たい美形って感じの雰囲気だけれど、右目の下にある小さな泣きボクロがどこかセクシーさを醸し出している。穏やかな微笑みとともに紡がれるのは落ち着いたテノールボイスで、気を抜くとうっかり聞き惚れてしまいそうだ。イケメンなのに声までいいなんて、ズル過ぎる……！

そしてふたりとも、見上げてしまうほどに高い身長と引き締まった体

を持っていた。強いて言うなら身長は春野さんの方が、体の厚みは秋瀬さんの方が少し大きいくらいだけれど、私から見ればどちらも見惚れて緊張してしまうレベルなのは変わらない。まあ体が引き締まってるのはインストラクターさんなら当たり前のことなのかもしれないけど……。

（……どうしよう、イケメンの破壊力舐めてたかも）

こんな人たちに囲まれてトレーニングなんて、最後まで心臓がもたないかもしれない。今からでも断って帰った方がいいかなあ……。

「……どうされましたか？」

そんなことまで考えていると、春野さんが心配そうに声をかけてきた。どうやら考えていることが顔に出てしまっていたらしい。

（うん、やっぱりここまで来ておいて今更帰るなんてなしだよね）

「いえ全然！なんでもないです！」

緊張を押し隠すように笑顔を作って返せば、朝田さんはほっとしたよ

うに笑顔になった。

「それならよかったです。もしなにかご不満やご要望等あればすぐに仰ってくださいね。」

さてそれでは、モニター体験の方始めていきましようか。まずはこちらの専用トレーニングウェアに着替えていただきます。更衣室はあちらにありますので、着替えが終わり次第声かけてくださいね。

ああそれと、もうひとつ。着替えの際は、ブラジャーやショーツなどの下着類も全て脱いでからの着用をお願いします。こちらのウェアも最新技術で作られています、素肌の上に直に装着する形でないと最大限効果を発揮できないんです」

穏やかな口調で着替えについて説明してくれる春野さん。

……ブラもショーツも全部脱がないといけないのかあ。ちよつと恥ずかしいけど、トレーニングするための服だしそんなに恥ずかしいことに

はならないよね、きつと。

「はい、分かりました！それじゃ、着替えてきますね」

そう言つて、私は案内された更衣室の中へと足を踏み入れた。

＊＊＊

「お着換え終わりましたか？」

カーテン越しに、秋瀬さんの穏やかな声が聞こえる。

「あーいや、すみません……着替えは終わってるんですけど、ちょっとその……」

更衣室に入ってから、もうそこそこの時間が経っている。心配をかけてしまっているのは分かるのに、歯切れの悪い言葉しか返せないのがもどかしい。

自分で言つたとおり、着替えはとつくに終わっていた。……だというのに、私はまだ出ていくことすら出来ていない。

(……だ、だってこんなの……)

ちらり、トレーニングウェアを着た自分の身体を見下ろす。

上下セパレート式の、グレーのトレーニングウェア。トップスは二の腕まで、ボトムスはふくらはぎまで伸縮性の高い布地でしっかり覆われていて、一見露出度は高くないように見える。

……けれど。

(さ、さすがに布地薄すぎない？ 肌に密着しすぎておっぱいの形とか、……ち、乳首までぼっちり浮き上がっちゃってるし……♡♡)

視線を少し下にずらしただけで、胸の膨らみが布を押し上げてしまっているのがよく見える。それどころか、胸のてっぺんにある小さな突起までどこにあるのかまるわかりだ。恥ずかしさで、思わず頬が熱くなる。

……しかも、問題はそこだけじゃない。

(しかもこれ……おまんこの形まで見えちゃってる……♡♡)

さらにもう少し視線をずらせば、足の付け根、おまんこの割れ目がレギンスの布地にぴったりと吸いついてしまっている。見えてはいないけど、多分おしりも同じことになってるはず。

もちろんすぐに指で布地を伸ばして食い込まないようにしたけれど、トレーニングで体を動かしてるうちにまた食い込んだじやうんじやないかって気が気じゃない。そのたびに位置を調整するにしても、その行動自体がそもそも恥ずかしいのに……♡♡

ぐるぐるぐるぐる、外に出る踏ん切りがつかないまま悩み続けていたそのとき。

ふと、カーテンが開いた。

「きゃっ!？」

「すみません、呼びかけても返事がないのでご気分が優れないのかと。どうかなさいましたか？」

目の前には、心配そうな表情を浮かべた秋瀬さんの姿があった。どうやら悩むあまり呼びかけを無視してしまっていたらしい。

「あ、す、すみませ……っ♡♡」

謝っている最中で自分の格好を思い出し、とっさに両手で胸と股間を隠した。……いくら用意されたトレーニングウェアとはいえ、この格好はさすがに恥ずかしすぎる……!!♡♡

焦る私とは裏腹に、秋瀬さんの表情は穏やかなまま。

「着替えてくださったんですね。よくお似合いですよ。ボディラインがしっかり出ているので、どこがどう鍛えられているかすぐに分かりますね。薄い布地を使用していますし、着心地も軽いでしょう?」

「っひ!?♡♡は、はい……♡♡」

穏やかな声でトレーニングウェアについて説明してくれる秋瀬さん。けれど私はそれどころじゃなかった。

（な、なんで私のおしり揉んでの……♡♡）

秋瀬さんの指が、ぴったりと吸いつくトレーニングウェアの布地越しに私のおしりをやわやわと揉み込んでいた。男の人らしいごつごつと骨ばった指が、一ミリも隠れていない割れ目へとぴったり添えられている。すり……♡♡すり……♡♡と指が動いたび、思わず変な声が漏れそうになってしまう。

（だ、だめ♡♡こんなところで声なんか出したら絶対変態だと思われる……！♡♡）

「おや、どうされましたか？少し息が荒いようですが」

「っあ♡♡い、いえなんでも……♡♡」

（やばい、息乱れてるのばれちゃってる♡♡）

恥ずかしさに思わず唇を噛みしめる。手を掴んで止めさせようにも、腕を動かしたらおまんこもおっぱいも見えてしまうせいで出来そうに

ない♡♡

震える私をよそに、秋瀬さんの手つきはどんどん大胆になってゆく。「太ももの内側は蒸れやすい部分ですが、このウェアは通気性抜群なのでご安心を。汗をかいても快適ですよ」

「んっ……♡♡そ、そうなんですね……♡♡」

太ももの内側を、骨ばった指が優しく揉み込む。すりすり♡♡と指が動くたび、下半身にぐっと力が入って内股になり秋瀬さんの手を脚で挟みそうになってしまう。

「おへその下部分や腰回りはなかなか脂肪の落ちにくい部分ですが、うちでトレーニングを続けていけば劇的な改善を見込めます。まずはこうしてマッサージするところから……」

「ふ、んん……♡♡っひ、♡♡あ、いやなんでも……♡♡~~~~♡♡♡」  
下腹部から腰にかけての部分に指が這いまわるたび、くすぐったさと

何かよく分からない感覚で変に力が入ってしまい思わず腹筋がつりそうになってしまう。

こんなのおかしい。声を上げて止めてもらうべきだ。

……頭ではそう思うのに、こちらをうかがう秋瀬さんの表情はどこまでも真剣で、こっちの方がおかしいんじゃないかって思えてくる。

（そうだ、これはきつとただウェアの着心地を確かめてるだけ♡♡だって普通に考えて、こんなイケメンが私にそんな欲求持つわけないし……変な気分になっちゃってる方がおかしいんだから、がんばってがまんしないと……♡♡）

「お待たせしちゃってすみません、マシンの準備出来ました！」

ぱたぱたと聞こえてきた足音とともに、カーテンの向こうからひよつこりと春野さんの顔がのぞいた。明るい声音に、秋瀬さんの指が離れていく。

（た、助かった……）

心の中でそっと息を吐いた。あのままじゃきつと、いつかとてもない痴態を晒してしまっていたに違いない。

（……やっぱり、このウェアはちよつと恥ずかしいな。二人に言つて、別の服でモニターを受けられないか聞いてみよう）

「あのすみません、ちよつと相談なんですけ、ど……」

「すみません、ご案内の前にちよつと失礼しますね」

意を決して紡いだ言葉は、すぐに途切れてしまった。

「え？……きやつ！み、見ないでえ……♡♡」

突然更衣室の中へ上がり込んできた春野さんが、股間を覆っている私の手をぐいっと退けたのだ。

とっさに悲鳴を上げながら隠し直そうとしたけれど、後ろから伸びてきた秋瀬さんの腕によって両方の手首をあっけなく掴まれてしまう。あ

っという間に、おまんこもおっぱいも隠す術がなくなってしまった。

「ああ、やっぱり股間の部分にじっとり汗かいちゃってますね。入った瞬間とっても良い匂いがしたので、すぐに分かつちゃいました」

うっかりすると鼻先がついてしまいそうなほどの至近距離で私のおまんこをまじまじと眺めながら、朝田さんはにつこりと微笑む。良い匂い？とちょっと心の中で首をかしげたけれど、インストラクターさんの立場で臭いだなんて言えないだろうしきつと気を遣ってくれたんだな。「ひっ……♡♡あ、そ、そうなんです♡♡汗かいちゃって、その……」

春野さんが言ってくれた汗という言葉に乗っかって、しどろもどろになりながら言い訳する。おまんこにびったりと張り付く感触はどう考えても汗とは違うものだったけれど、インストラクターさんに体を触られて濡れちゃいましただなんて口が裂けても言えないからこれで通すしかない。

どうにか視線から逃れたくて掴まれた手を振りほどこうとしたけれど、あいにく私程度の力ではびくともしなかった。

「なるほど、汗をかいてしまったんですね。……でもおかしいな、空調管理は徹底してるはずなんです……」

ひょっとして、トレーニングウェアの構造に欠陥があったのかな？ にぶんこちらはまだ試作品ですから、お客様の着心地に配慮出来ない部分があるのかもしれませんが。もしご不快でしたら着替えを……と言いたいところなんですが、あいにくこちらでは今替えのウェアがないんです。もしお客さまの方で替えのウェア等お持ちでしたら、着替えていただいても大丈夫なんですけど……」

申し訳なさそうに眉を下げる春野さん。応募するときにはトレーニングウェアはこちらで用意すると言われていたため、当然替えなんて持ってきていない。

（そ、そんな……着替えられないなんて……♡♡）

つまりそれは、モニター終了までずっとこの恥ずかしい恰好のままいなきゃいけないってことだ。恥ずかしさで思わず頭がくらくらする。

（やっぱりもう断って帰ろうかな……いやでも、せつかくのダイエットチャンスだし……）

頭の中でぐるぐると考えた結果、私が選んだのは「このままの格好でモニターを続ける」だった。

「……いえ、大丈夫です。このまま続けます！」

（今帰るって言ったら変に思われるかもしれないし……せつなくならちゃんと運動して、しっかり汗かいてから家で洗って返した方がいいよね）

私の言葉を聞いて、春野さんが申し訳なさそうに頭を下げた。

「すみません、ありがとうございます。まだ試作段階なので、これから

お客さまのニーズに合わせて改良されていくと思うので……そうだ、後学のために少しじっくり観察させてください」

「え？ ちょ、待つ……！♡♡」

真剣な表情を浮かべた春野さんの手が、私のおまんこへと伸びる。制止の声は届かないまま、おまんこに指を添えられてくぱあ……♡♡と押し広げられてしまった♡♡

広げられた部分の布は、言い訳がきかないくらいにぐっしりと濡れてしまっている。元がグレーなせいで濡れているのがなおさらはつきり分かってしまって、あまりにも恥ずかしい……♡♡

「うーん、他の部分との違いは特にないような……。強いていうならおまんこの上にあるクリトリスがずつとびくびく震えてることくらいだけど、それが関係あるとは思えないしなあ。

今この瞬間もずっと、こうして見てるだけで汗の染みが広がっていつ

てるし……お客さんのためにちゃんと原因究明したいんだけどなあ……」

（ああああっ♡♡ごめんなさい♡♡おまんこ見られただけで濡れちゃう変態女でごめんなさい♡♡クリちゃん勃起させちゃってごめんなさい♡♡）

おまんこをまじまじと見られながら、あまりの恥ずかしさに震える私。そんな情けない姿を見かねたのか、秋瀬さんが口を開いた。

「こら春野、そんなにまじまじおまんこばかり見るんじゃない。失礼だろう？」

落ち着いた声で同僚を咎める秋瀬さんの声に、申し訳なさが募ってゆく。勝手に恥ずかしいことになっちゃったのなんて、全部私の責任なのに……。

「俺の方もすみません。そんなことになっているとは気づかず、つい説

明に夢中になってしまいました。ご不快な思いをさせてしまい申し訳ない」

「あ、いやそのっ！♡♡べ、べつに嫌だったとかそんなじゃ——♡♡」

——こりっ♡♡

「ほおっ!?♡♡♡♡んひっ♡♡な、なんでっ……♡♡」

紡ぎかけた言葉は、突然襲ってきた這い上るような快感に飲み込まれてしまった♡♡おそろおそろ下を見れば、手首を掴んでいたはずの秋瀬さんの指が、ぼっちり浮いた私の胸の突起をつまみ上げている♡♡突然のことに思わず腰が砕けてしまいそうだったけれど、秋瀬さんがとっさに私の足の間に膝を割り込ませてくれたおかげでどうにか倒れ込まずに済んだ。……いや、今の状況じゃ倒れなくて済んで良かったのか微妙なところだ……！

混乱する私を置き去りにして、秋瀬さんが言葉を紡ぐ。

「こんなにぴんぴんに勃起している乳首を放置しておまんこしか見ないなんて、失礼にもほどがあるだろう？少しつまんだだけで腰がぐく震えてしまう優秀な乳首だぞ？まずはこうして指でかりかりしてやるのが礼儀だろうが。しかもこの乳首、触ってもいないのにひとりで勝手に勃ったんだぞ。感覚が鋭敏で、どうぞ弄ってくださいと自主的にアピール出来るような優れた神経を持っていることの証だ。こんなに素晴らしい乳首をスルーするなんて、お前は何も分かってないな」

かりかり♡♡かりかり♡♡

「ほおんっ♡♡ちよ、やめてください♡♡指でかりかりしちゃいやあっ♡♡あびーるなんてっ、してないってばあ♡♡」

無骨な男の人の指で胸の突起を優しくかりかり♡♡と弾かれて、思わず間拔けな声が漏れてしまう。まるで私が発情して誘ってるみたいな秋瀬さんの言い草にだって反論したいのに、ぴんと勃った胸の突起を優し

くくすぐられるだけで頭がぼーっとしてしまって、うまく言葉がまとまらない♡♡

「ほんとだ、たしかにすっごく勃ってる♡♡ぴんぴんになって布押し上げちゃってるね♡♡指で弄り回すたびにおまんこにいっぱい汗かいちやってるし……やっぱりもう運動前のマッサージは大切ですね♡♡」

穏やかな春野さんの声に、恥ずかしさが募ってゆく。せめて足を閉じたいのに、秋瀬さんの膝に支えられてるせいでそれすら出来ない……

♡♡

「でも、ぶっくり度合いでいったらこっちも負けてないよ？♡♡」

そんな言葉とともに、また春野さんの指が私のおまんこへと伸びる。

「へ？な、なに……んひっ!?♡♡やあっ♡♡そこだめ♡♡クリちゃんつかないで♡♡」

春野さんのすべすべで綺麗な指先が、おまんこの上部分にある小さな



「そんな、とんでもない！自分から体を動かさせてとっても素晴らしいですよ♡♡せっかくですし、もうちょつと頑張つて腰へこダンス踊つてるところを見せてください♡♡」

「そ、そんな……んおっ♡♡ふうう♡♡くうんっ♡♡」

爽やかな笑顔でそんなことを言いながら、裏筋をかりかり♡♡こしょこしょ♡♡とくすぐり続ける春野さん。ぞくぞくと震えてしまうような気持ちよさに、腰が揺れてしまつて止まらない♡♡

「おお、これは素晴らしい腰の動きですね。俺もぜひお手伝いさせてください」

「へ？……ふおおおっ♡♡乳首こねないでえ♡♡腰はねちゃうう♡♡」  
後ろからどこか楽しそうな低温ボイスが聞こえてきたと思つたら、胸の突起を優しくくすぐっていた秋瀬さんの指がスピードを上げて動き始めた。人差し指の先で突起をくくに♡♡とこね回されて、思わずぞ

くぞくと背筋が震えてしまう♡♡

「うわ、足のつま先までぶるぶる震えちゃってますよ♡♡腰へこダンスが足の筋肉にも効いてる証拠ですね♡♡クリトリスの方も今まで以上に充血してぷっくり膨らんじゃってますよ、血行もよくなってるみたいで素敵です♡♡」

「動くたびにおまんこから汗を垂れ流しているのが脚の感触で分かります。すっかり代謝もよくなってるみたいですね」

「ふぅ〜♡♡♡くうん♡♡んおお♡♡おお♡♡♡ほお……♡♡」

（ち、ちがうつ♡♡これただイキそうになってるだけ♡♡腰がくがくして♡♡♡クリ勃起して♡♡頭がぐっぐっ沸騰しそうになって♡♡♡やばい、これ絶対やばい♡♡♡）

三つの突起をいっぺんに責め立てられて、焦る心とは裏腹に体はどん

どんと高みに昇ってゆく。口からは本気の喘ぎ声がひっきりなしに漏れてしまっていて、きつと今の私は誰がどう見ても絶頂寸前なのがあるわりの恥ずかしい顔しちゃってるんだろなって見なくても分かってしまう……♡♡

それなのに、ふたりともちっとも手を止めてくれない。穏やかで優しい眼差しと手つきで、的確に私を追い詰めてくる♡♡

（やだやだ乳首押しつぶさないで♡♡クリこちょこちょむり♡♡ずっと続けられるのむり♡♡ああああだめだめだめ、イっ……！♡♡）  
——ぴたっ♡♡

「……へ？♡♡」

いく寸前。本当にぎりぎりのところまできて、不意にふたりの手が止まった。……示し合わせたとは思えないような、完璧なタイミングで。「おっとすみません、ついマッサージに熱中しすぎちゃいました♡♡あ

んまりお時間をとらせてもあれですし、そろそろ準備運動に移りましょうか」

目の前で絶頂を取り上げられたクリトリスが、切なそうにひくひくと震えている。本当ならこんなイケメンの前で恥ずかしいイキ顔をさらさなくて済んだことを喜ばないといけないはずなのに、これじゃまるで私がイけなくて残念だと思ってるみたいだ。そんなのあまりにも恥ずかしすぎる……♡♡

羞恥心に震える私を前にしながら、春野さんはにっこりと愉しげな笑みを浮かべていた。

「じゅ、じゅんびって……？♡♡」

「ええ、マシンを使ったトレーニングの準備運動です。本当はトレーニングルームで行う予定だったんですが……せつかくですし、ここで始めちゃいますね。道具もちゃんと持ってきたので」

そう言って、懷から何かの道具を取り出す春野さん。……それがなんなのか、一目見ただけで分かってしまった。

春野さんの大きな手にすっぽり収まるくらいのサイズで、持ち手の部分がくの字型に曲がっている。そして上の方には小さな口のようなものがついていて。——どくん、どくん。心臓がうるさく鳴り響き始める。「これ、うちのジムで開発された特製のマッサー器具なんですよ。新しいマシンを使う際の準備用品でもあるんですけど、これ単体でも使用できるんです。せっかくなので、こちらでも体験していただけたらと思います」

爽やかに微笑む春野さん。100人いたら100人が見惚れてしまうような素敵なお顔だけれど、私は内心それどころじゃなかった。

（これ、クリトリス用の吸引バイブじゃん！私がいともオナニーするとかお世話になってるやつ……！）

そう、春野さんの手に握られたそれは、どこからどう見てもよく知ったオナニーアイテムだった。くの字型に折れ曲がった、ナカとクリを同時に責めるのにぴったりの形状。シリコン製の柔らかい素材。先端にある、突起を吸い上げて刺激を与えるための穴。……全部めちやくちや見覚えがある。

実をいうと、私は割と性欲が強い方なのだ。といっても男の人としたことはあんまりなくて、もっぱら道具のお世話になっている。その中でも吸引バイブは、私がいちばんハマったアイテムと言っても過言じゃなかった。クリとナカを同時に責めながら自分で乳首を弄るのが、今の私のお気に入りの方なのだ。

当たり前の話だけど、誰にも言ったことなんてない。数少ない男性経験の中でも道具を使ったことなんてないから、他人に吸引バイブを突き付けられるなんて初めてのことだった。

「今回のトレーニングではこの器具を下半身、主にクリトリスのマッサージュに使用します。この口の部分を見てももらえれば分かると思うんですけど……ほら、中に細かいイボみたいなのがびっちり生えてるでしょ？これをクリトリスに被せて、側面のスイッチを押すと……」

—  
ヴ  
ヴ  
ヴ  
ヴ  
ヴ  
♡  
♡  
♡  
♡

あまりにも重たい振動音に、思わず口から甘ったるい悲鳴が漏れてしまふ。

私の使ってるやつ、あんなクリちゃんいじめるの専用みたいなイボイボなんてなかったし……それにこの振動音、聞いてるだけで子宮に響いちやう……♡♡)

こんなの使われたら、絶対変になってしまう。頭の中で警報が鳴り響く。

春野さんはマッサージ器具って言ってたけど、ひょっとして気付いてないのかな。いやまさかそんなわけないと思うけど……。

とにかく、これはだめだ。ただでさえついさっき絶頂寸前まで追い詰められて、私のクリトリスは今もがちがちに勃起したままなんだから。こんなの絶対に耐えられるわけが――、

「……器具の説明も済んだので、乳首へのマッサージの方再開していきますね」

きゅむっ♡♡

「んおっ!?!?♡♡」

無理ですと口を開く前に、胸の突起に添えられたままだった秋瀬さんの手が動き出した。ぽつてりと膨らんだ突起を優しくつままれ、言おうとしていた言葉もあっさりと消し飛んでしまう。

ぞくぞく、ぞくぞく♡♡甘い刺激に、ぶるりと背筋が震える。出来ることなら逃げたいのに……後ろから胸の突起を弄り回す手が止まらないせいで、体に力が入らない♡♡それどころか、三つの敏感な突起をいっぺんに責められる刺激を脳みそが勝手に想像するせいで、自然と内股になつて秋瀬さんの膝に体を預けてしまう♡♡

「んあっ♡♡あ、あの……っ♡♡それ、ちよっとしんどくてえ……♡♡♡♡びとめてもらえませんか……?♡♡♡♡♡」

口を開くたび上がりそうになる甘ったるい声を噛み殺しながら、ぷっくりと膨らんだ胸の突起を優しくこね回している秋瀬さんへとどうに

か声をかける。

「すみません、これも大事なトレーニングの準備なので……こっちの突起もマッサージしておいた方が、全身の血行もよくなりますからね。こうやってぴんと勃った突起を指で押しつぶしたりこね回すことで、胸を中心にコリがほぐれていくんですよ」

穏やかで落ち着いた声。どこまでも優しいのに、私の言葉はちっとも聞き入れてもらえないまま。骨ばった指が、ぴんと尖った胸の突起をくにくに♡♡こりゅこりゅ♡♡と優しくこね回し始めた。甘ったるくて優しい刺激に、また力が抜けてしまう……♡♡

「ふああ♡♡で、でもっ♡♡ごめんなさい、それされるたびに足の力抜けちゃいそうで♡♡集中できなくてえ……♡♡」

「おや、それは困りましたね。でも大丈夫ですよ。俺が膝で支えていますし、頑張って足で踏ん張っていればすぐに済みますから」

「ひう……♡♡で、でもお……♡♡」

支えてますし、と言いながら膝を軽く揺する秋瀬さん。その拍子に硬い膝でおまんこが擦れて、思わず小さく上ずった声を漏らしてしまった。

（こ、こんな体で踏ん張るなんてむり……！♡♡）

あまりの恥ずかしさに思わず唇を噛みしめた私を見て、春野さんが優しく微笑みかけてくる。

「大丈夫ですよ、これはあくまで全部準備運動でありマッサージですから。それに全部トレーニングウェアを着用した状態で行ってますし、「よっぽど敏感な体の持ち主でもない限り」なんともないはずですよ」

「……っ♡♡」

（そ、そんな言い方ずるい……！♡♡それじゃまるで、反応しちゃった私の身体が淫乱みたいになっちゃう……♡♡それにトレーニングウェアだって、布地が薄すぎて全然体守れてないのに……♡♡）

心の中で泣きそうになるけれど、表には出せない。だって二人はただ仕事をしてるだけで、勝手にかき乱されて痴態を晒してるのは私の方なんだから。

何も言えないままもじもじしている私の姿をどう捉えたのか、春野さんがにっこりと微笑んで口を開いた。

「それじゃ、そろそろ始めていきますね♡♡ゆっくり近づけていきますんで、その間に心の準備の方済ませておいてください♡♡」

明るい口調とともに、手に持った吸引バイブがどんと私のおまんこへ近づいてくる。

(……こ、こうなったら頑張つてがまんするしか……♡♡足とおまんこに力入れてっ♡♡せめてイクのだけはがまんしないと……♡♡)

ヴヴヴヴ♡♡

くにくにくにく♡♡すりすりすり♡♡

「ふーっ……♡♡ふーっ……♡♡」

ぽっちりと浮いた胸の突起を優しく撫でまわされ、背筋にぞくぞくと甘い快感が這い上ってくる。小さな機械が近づいてくるたび鼓動が速くなり、自然と息が荒くなってしまう。

「おや、腰が揺れてますね。俺の膝に生温かい体温が伝わってきてますよ。自主的なストレッチですか？素晴らしい」

耳元で聞こえる秋瀬さんの声。……どうやら無意識に腰をへこつかせてしまっていたらしい。恥ずかしいのに、指摘されても止められない……♡♡♡

「腰だけじゃなくてクリトリスもしっかりびくびく動いてますね♡♡どこに器具を当てればいいのか分かりやすくしてつても助かります♡♡そろそろ器具がおまんこに到着しちゃうので、心の準備お願いしますね♡♡」

明るく爽やかな春野さんの声に、否が応でもクリトリスへと意識が集  
中してしまう。太ももがふるふると震えて、呼吸がいつそう速くなる。  
（だ、大丈夫大丈夫……！♡♡刺激が来ても、ちゃんとおまんこに力さ  
え入れとけば我慢できるはず……！♡♡これはあくまで準備運動でマ  
ッサージなんだから、こんなのでいく方がおかし、）  
足のつま先になけなしの力をぐっと込めながら、心の中で必死に自分  
へと言い聞かせていたそのとき。

——ヴヴヴヴヴ……ちゅぽっ♡♡

ぴくぴくと震えるクリトリスが、バイブの吸込み口にととうと捕まっ  
てしまった。分かっていたことだけれど薄すぎる布地は私の身体を快感  
からちつとも守ってなんてくれなくて、敏感な肉豆を吸い上げられる感  
覚と強烈な振動をダイレクトに伝えてくる。

「んおっ!?♡♡ほお……っ♡♡」

せめておまんこに力を入れて衝撃に備えたかったのに、それも出来なかった。何故ならバイブがクリトリスを飲み込むのと同時に、秋瀬さんが私の胸の突起を指できゅっ♡♡と挟み込んだから。

——くにくにくにくに……きゅむっ♡♡

背筋に走った甘いぞくぞく感に思わずかくんと力が抜けて、踏ん張るどころか秋瀬さんの膝におまんこを擦りつけるような形になってしまふ。そんな私に構うことなく、彼の無骨な人差し指が挟み込まれて押し出された胸の突起をかりかりかり♡♡と高速で優しくくすぐり回しはじめた♡♡じわりと滲み出した愛液によって、彼のウェアまで濡れていく……♡♡

「あああっ♡♡ご、ごめんなさ……♡♡ふうっ♡♡」

「ん？……ああ、お気になさらず。準備運動とはいえ運動ですから、汗をかいてしまうのもしかたのないことですよ。どうぞ好きなだけ汚して

ください」

にっこりと微笑みながら紡がれた言葉に、ほっと安堵する。……それと同時に、好きなだけ……なんて彼の言葉にくらりと脳みそが揺れた。(……いやいや、こんなの社交辞令に決まってる！真に受けたら絶対変態だと思われる……！が、頑張って耐えないと……！♡♡)

悲壮な決意もむなしく、我慢しようとすればするほどおまんこに意識が集中してしまう。ちゅぽぽ……♡♡という可愛らしい音とともにバキバキのクリトリスが吸い上げられ、引き伸ばされた幹の部分を内側に生えた無数のイボイボがぶるぶる♡♡と震わせては責め立ててくる。

「ふ、ぐぐぐ……♡♡ん、くう……♡♡♡」

三つの突起をいっぺんに責められて、あまりの気持ちよさに足の震えは止まらないまま必死に声を噛み殺す。レギンスのおまんこ部分に、どんなシミが広がってゆく……♡♡

（や、やばいやばいやばい♡♡こんなのゼッタイむり♡♡すぐいっちゃ♡♡恥ずかしいイキ顔さらしちゃう♡♡）

「どうしましたか？顔が赤くなっちゃってるみたいですけど……」

太ももをぶるぶると震わせながらイキそうになるのを必死に堪えている私に、春野さんが心配そうな表情で声をかけてくる。よかった、止めてもらえるチャンスだ……そう考えて口を開こうとする私に、彼は続けて。

「まさかとは思うんですけど……準備運動で感じちゃったわけじゃないですよ？♡♡」

「っ、!?!♡♡」

心の中を見透かされたような言葉に、思わず息を吞んでしまう。

「こら、失礼だぞ春野。これはあくまでただの準備運動なんだから、感じる人なんているわけないだろう？もしいるとしたら、よっぽどの淫乱

だけだ」

「だよねえ。ただの準備運動で感じちゃうようなドスケベな女の人なんて、そうそういるわけないもんね♡♡……でもすごく顔真っ赤だし、もしかしたらって思ったんだ。

あの、もし気持ちよくなっちゃって辛いとかあればすぐに仰ってくださいね。すぐに中断しますから。……まあその場合、お客さんはただのトレーニング前の準備運動で感じちゃう変態さんってことになっちゃいますけど……大丈夫ですよ、僕たち全然偏見とかないので♡♡」

「……♡♡」

優しく微笑む春野さんの笑顔に、私は何も言えなくなってしまった。だって今止めてくださいとお願いしたら、それはつまり自分が変態であると認めたことになってしまう。

……あとあと思い返したらおかしいことだらけだけど、このときの私

はふたりの前で気持ちいいのを我慢するのに必死でうまく頭が回って  
いなかったのだ。

「だ、だいじょうぶです♡♡気持ちよくなつてなんか、っ♡♡ないので  
えっ♡♡ふううっ♡♡っ、つづけてくださいっ……♡♡」

腰をくねらせてどうにか快感を逃がそうとしながら、へたくそな笑み  
を作る。太ももはぶるぶる震えて、ぐっしり濡れたおまんこはウェア  
が張り付いてかたちまでくっきり浮いてしまっていた♡♡

「そうですか、ならよかったです♡♡それじゃ、少し振動強くしますね  
♡♡」

言うが早いか、春野さんの指が吸引バイブの側面をとん、と押した。

—— ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ♡♡♡♡

「ほおっ!?♡♡んおおっ♡♡おおっ♡♡」

瞬間、バイブの振動が一段階強くなった。吸込み口に根元まで食べら

れてしまった勃起クリトリスが、無数のイボイボによってもみくちやに  
されてしまう♡♡裏筋を擦り上げられ、根元をほじられ、先っぽをくり  
くりと押しつぶされて♡♡……こんなの、耐えられるわけない♡♡

「あつだめだめ♡♡いっ……っ♡♡」

ぱちぱちと、目の前で極彩色の火花が散った。太ももはがくがくと震  
えて、肌からぶわりと汗が噴き出す。

イク、と最後まで言わなかったのは自制心でもなんでもない、ただ気  
持ち良さに飲み込まれて言葉が出なかっただけだ。止まらない腰の震え  
に、どんどんと広がっていくおまんこのシミ。私が絶頂してることなん  
て、一目見れば分かっってしまうだろう。

……そのはずなのに。

くにくに♡♡くりくり♡♡

ヴヴヴヴヴヴ♡♡♡♡

「ひっ……♡♡んああっ♡♡待っ……！♡♡~~~~♡♡」

誰が見ても分かるくらいにあからさまなガチイキをきめてしまったはずなのに、胸の突起を弄る秋瀬さんの指も、春野さんの持つ吸引バイブの動きも何一つ変わらないままだ。そもそもいった瞬間全身の力が抜けたのに、秋瀬さんに肩を、春野さんに膝をそれぞれ支えられているおかげで倒れ込むことも出来ない。いった直後なのに弱い部分をひたすら責められて、甘い電撃みたいな快感からずっと逃げられない……♡♡

「ふあああ♡♡♡あっ、あの♡♡♡そろそろ……~~~~♡♡♡ふづう♡♡♡そろそろ♡♡♡ほぐれたので♡♡♡とれーにんぐに……あっそこりりりだめ♡♡♡力ぬけちゃいます♡♡♡」

意を決して口を開いたものの、襲ってくる快感のせいでちっとも上手く喋れない。後ろから軽く乳首を捏ねられただけでも背筋が甘く蕩けて腰が震え、言葉が喘ぎ声に変わってしまう♡♡

「おっと、大丈夫ですか？……申し訳ないんですが、まだ足りないので続けさせてもらいますね。これから行うのは試運転中のマシンによるトレーニングですし、何かあってからじゃ遅いので」

「そ、そんなあ……♡♡……っ、ほおっ♡♡おっ♡♡ふううう……っ♡♡」

申し訳なさそうにこちらを伺う春野さん。表情は穏やかなのに、細い指に握られた吸引パイプは私のクリトリスにとんでもない快感を与え続けている♡♡イったばかりのはずなのに、イボイボが気持ちいいところをちっとも離れてくれないせいでまた次の波が来ちゃいそう……♡♡恥ずかしさを堪えて腰へこダンスで気持ちいいの必死に逃がそうとしてるのに、ふたりがかりで体を支えられてしまっているせいで全然逃げられない♡♡

「力が抜けてしまうということはリラックスしていただけてるんです

ね、嬉しいですよ。大丈夫ですよ、たとえ倒れそうになっても俺たちがきちんと支えますから。

というわけで、人差し指で乳首こねこねの方続けさせていただきますね。俺たちが大丈夫そうだなと判断したら終わるので、それまで頑張ってください」

後ろから聞こえる落ち着いた声。……大丈夫そうだなと判断したらって、いったいいつになるんだろう……それまでずっとこのままとか、そんなの絶対むりなのに♡♡声を上げたいのに、後ろから伸びる手でぴんと尖った突起をこねくり回されるたびに背筋がぞくぞく震えて、腰が勝手に揺れてしまう♡♡

息も絶え絶えになりかけている私を見て、春野さんが口を開く。

「あはは、腰がすっごく揺れてますね♡♡こちらからのマッサージだけじゃなく、自分から積極的に腰をふりふり♡♡しながらストレッチし

てくださってとっても素晴らしいです♡♡あ、でも安心してくださいね。たとえどんなにへこ♡♡って腰を動かそうと、準備運動が終わるまで絶対に離しませんから♡♡」

アイドルみたいに爽やかな微笑みから放たれた言葉の通り、私がどんなに腰をへこつかせようと、吸引パイプは勃起クリトリスからちっとも離れてくれなかった♡♡とはいえもう今は快感を逃がすために自分の意思で腰を動かすことなんて出来なくて、ただ反射的にびくびく動いちゃってるだけなんだけど……♡♡

「ふづう……♡♡んっ♡♡くう……♡♡」

布地を押し上げるほどに勃起しきった肉豆を思い切り扱かれて、あまりの気持ちよさについ上ずった声が漏れてしまう。そんな私の姿を見下ろして、秋瀬さんが口を開いた。

「……そろそろ結構ほぐれてきましたね。おまんこもとろとろ……じゃ

なくて、とっても血行が良くなってきたみたいですし」

優しい声に、心の中でほんとと安堵したのは一瞬のこと。

「よし、それじゃ最後に最大出力でマッサージして終わりましたようか

♡♡

「……え？」

あまりにも爽やかな笑みとともに放たれた春野さんの言葉に、一瞬フリーズしてしまった。細い指が側面のスイッチを押すのを、呆けた顔でただ眺めていることしかできなくて。

——ちゅこここここ♡♡♡♡♡

——ヴヴヴヴヴ♡♡♡♡♡

「おっっ、ほおおお〜♡♡♡♡♡」

がくがくがく♡♡♡ぷしやああああ♡♡

「うっわ、すっごいイキ潮……じゃなかった、汗ですね♡♡ウエア貫通

して床にぼたぼた垂れちゃってますよ♡♡もちろんあとできちんとお掃除させていただくので、気にせずいっぱい噴いちゃって大丈夫ですよ……って、全然聞こえてないねこれ。はは、すっごく気持ちよさそ♡♡」

「仕方ないだろう。勃起乳首を弄り回されながら吸引バイブでクリトリスを吸われて、耐えられる女などいるわけがない。……まあそれを抜きにしても、こいつはかなり敏感なようだが」

「かなり早い段階でイキそうになってたもんねえ。必死でいくの我慢してるよきの真っ赤になった顔、可愛かったなあ……♡♡」

「なんなら俺が尻を揉んでるときからずっと発情してたくらいだからな。きつと私生活でもオナニー狂いなんだろう。感じてるのがまるわかりの顔で指を止めてくださいだのもう解れたのであの言ってきたときは、今すぐちんぽを突っ込んで啼かせてやろうか悩んだくらいだ」

「あーそれめっちゃ分かる！気持ちよくなんなってないので続けてくださいーって言ってきたときのぐちゃぐちゃな笑顔、死ぬほど可愛かったもんねえ。

……でもだめだよ。まだようやく下ごしらえが済んだところなんだからさ♡♡」

「ああ、分かってるさ。せっかく最高に楽しめそうない”お客さま”が来てくれたんだ、……精いっぱいおもてなししないとなあ？♡♡」

「はは、流石分かってんじゃない♡♡でもまずはここで、もう4〜5回くらいはイかせときたいな♡♡しばらくまともに歩けなくなるくらいの雑魚クリになるまで育ててからマシンに乗せた方が絶対楽しいし♡♡」

「はは、お前も大概いい性格してるなあ」

「え、だめ？」

「そんなわけないだろ、大賛成だ♡♡……なんて言ってるうちにもういきそうだな。喘ぎ声が切羽詰まってきてる。こんな短時間でいくなんてな。どこまで変態なんだこいつは……♡♡」

「んおおおっ♡♡あ、くうっ……♡♡……♡♡あ、あのっ♡♡もうそろそろっ……！♡♡ほんとにもう、ぜんぶほぐれたからっ♡♡♡♡はやくトレーニングに、あつだめイっ……！♡♡……♡♡」

私の頭をはさんでふたりが会話している。……乳首を弄り回す手も、吸引バイブを押し付ける手も、どちらも一切止まらないまま。あまりの気持ちよさと絶頂から降りてこられない焦りで、ふたりの会話はほとんど耳に入ってこない。

ふたりの方にも私の言葉は届いていないようだ。だってどれだけなりふり構わずに懇願しても、何一つ聞き入れてもらえないのだから。

「はいはい、あとちょっとですからね♡♡頑張りましょうね♡♡」

「すみません、まだ体がほぐれきっていないのでもう少し続けさせてもらいますね。ただのマッサージなので、リラックスしていただいて大丈夫ですよ」

……結局私がその“マッサージ”から解放されたのは、それから両手の指でも数えきれないほどの絶頂を味わったあとのことだった。

「うわ、クリめちやくちやデカくなってる。これもうちんぽじゃん♡♡」

「乳首の方もぷっくり膨らんで準備万端だ。……さて、そろそろ行くか」

「はーい！……それじゃ、失礼しますね♡♡」

「はーっ……♡♡はーっ……♡♡……え？」

さんざんイカされてへろへろになった体が不意に浮いた。見ればいつのまにか、両肩をふたりに支えられる格好になっている。

「すみません、歩くの難しそうだったので……このままトレーニングルームに着くまで肩支えさせてもらいますね」

「安心してください、今回使うマシンはともに歩けなくても使用できるので。モニター中は俺たちも精一杯サポートさせてもらいます。一緒に頑張らしましょうね」

心配そうにこちらを見ている春野さんと、穏やかに微笑む秋瀬さん。……思い出した。さっきまでの快樂地獄はあくまで全部ただの「準備運動」で、本番のモニターはまだ始まってすらいらないことを。

断って帰ろうにも、ふたりの腕を振りほどく力なんてもうどこにも残っていない。それどころかさんざん吸引パイプでクリトリスを責められたせいで、歩くたび勃起クリが太ももに擦れて腰が抜けそうになってしまふ。

逃げ場なんてどこにもない私は、大人しく答えを返すしかなかった。  
「……は、はい……♡♡がんばります……♡♡」

——恐怖のなかにある、ほんのわずかな期待には見ないふりをしたま

ま。